腕時計

咲蘭保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
腕時計

【Ｎコード】
Ｎ３５７２Ｙ

【作者名】
咲蘭保

【あらすじ】
大切な姉を失った宮野志保。
そんな志保を守る工藤新一。
砂時計の話を名探偵コナンの新志風にした作品です。
新一と志保の切ない恋愛を書いています。

始めに（前書き）

名探偵コナンと砂時計のコラボ作品。
砂時計の登場人物に名探偵コナンの登場人物を当てはめてみました。
カップリングは主に新志です。
※快志もあり。

始めに

設定
植草杏＝宮野志保
北村大悟＝工藤新一
月島藤＝黒羽快斗
月島椎香＝毛利蘭
杏の母親＝宮野明美
杏の祖母＝阿笠博士
楢崎歩＝前本茜〔オリキャラ〕
月島茉莉子＝中森青子
友達Ａ＝鈴木園子

・コミックをもとにして書くので台詞が多くなると思います。
・砂時計をもとにしていますが、登場人物の性格はほとんど名探偵コナンのままです。
・無理やりな設定もあると思います。
以上の条件でも読んでみたいという方は１話から読んで見てください。

1話：19歳夏・神鳴

『俺が守ってやっから。』
組織を潰して一年半。宮野志保19歳、夏。

私と工藤くんは組織と決着がついたあと、完成した解毒剤を飲み、元の姿に戻った。
その後、私は転校生として帝丹高校へ通うことになった。
転校初日に私は蘭さんに声をかけられ、友達になった。
工藤くんは元に戻ってから、蘭さんに告白することもなく、以前と同じように《幼馴染》の関係を続けていた。
二人は以前から恋人、などと噂されていたらしいが
今ではそんな話を全くと言っていいほど聞かない。
私の知らない間に何かあったのだろうか、とも考えたが
二人の関係に私が口出しするのもよくない、と思い
私は何も聞かなかった。

志保「ねぇ、工藤くんいる？」

そう言って、私が声をかけたのはサッカー部のマネージャー前本茜だ。
工藤くんは復帰しても部活には入らなかったが、たまにサッカー部に顔を出す。
今日も朝から朝練に参加している。
こうして、工藤くんが朝から練習に参加するときは私が彼の分の弁当を作って持ってくる。

茜「今、練習中よ。弁当なら私が渡しておくから。」

蘭さんと工藤くんの噂がなくなってから工藤くんにアピールする女子が増えだした。
どうやら彼女もそのうちの一人らしい。

志保「じゃぁ、よろしくね。」

前本さんは私から大きな弁当箱を受け取り、笑顔で工藤くんにそれを持って行く。

志保（・・・はぁ。）

思わずため息をついてしまった。
そして、体をくるり、と回転させグラウンドを出ようとした。
そのときおーい、と少し離れたところから声がした。工藤くんだ。
彼は走って私のところに向かってきた。

新一「志保、弁当サンキュー。」
志保「別に。私の弁当のついでだから。じゃぁね。」

私は工藤くんに背を向けた。
すると、腕をギュっと掴まれ、彼と向かい合った。

新一「あのさ」

彼は元の姿に戻り、手足にしっかりとした筋肉がついている。
手もゴツゴツとしていて
小学生だったころより、男らしさが出ている。

新一「聞いてるか？」

志保「え？」

新一「これ・・・。修学旅行の話だけど自由時間、蘭や快斗たちと一緒に回らねーか？」

志保「考えとくわ。それじゃ。」

私はそっけなく返事をし、再び工藤くんに背中を向ける。
そして、私が歩き始めたとき、次は肩をつかまれた。
私は思わず肩に置かれた手を払いのけてしまった。

新一（にゃろ。）

「俺、今日も目暮警部に呼び出し受けてるから蘭たちと勝手にコース決めといてくれ。」

志保「はいはい。」

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

「「「うわー」」」
「山だ」「山ばっかりだ」「高校生にもなって修学旅行が山なんてな」

クラスの男子たちは愚痴をこぼしている。

新一「ったく、これじゃぁ修学旅行ってよりキャンプじゃねーか。

今日だってテント張って寝るんだろ？」
志保「今更、何文句言ってるのよ。あなただってこういうの好きじゃない。
小学生のころは探偵団の中であなたもそれなりに楽しそうだったわよ。」
新一「うるせー。」

こうして二人並んで小声で話すのは小学生の頃と変わらない。
でも、この光景を遠くから睨んでいる人もいる。
私はその視線に気づいて自然と工藤くんから離れていく。

志保（はぁ、面倒だわ。）
蘭「志保ちゃーん、テント建てるよー。」

十五分ほどしてテントは建て終わった。

蘭「やっと終わったね。」
園子「でも、雨降りそうじゃない？」
志保「あ・・・降ってきたわ。」

最初はポツ、ポツと降っていた雨も次第に大雨になっていた。

遠くで、「テント片付けろー！キャビンに集合！」という先生の声が聞こえる。

園子「今、テント建てたばかりなのに。」
志保「仕方ないわね。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

『雨と雷がひどいので安全のため今夜は全員キャビンで寝ることになりました。
　順番にシャワーをあびて今夜はゆっくり休んでください。』

カッ！！ガラガラ

「うおっ」
「みっ見たか、今の！落ちたんじゃねーか？」

快斗（はぁ、うるさい・・・寝られねーし。）

俺は一人、部屋を出た。

快斗（ん？あれは・・・）「志保？」

窓の外を見ている志保を見つけた。

志保「黒羽くん。どうしたの？」
快斗「いやー雷がうるさいし、へやのやつらもうるさいしで眠れなくて。」
志保「黒羽くんって雷苦手？」
快斗「苦手・・・なのかな。俺の親父が死んだ日、雷がすごくてさ。
　　それから雷がなるとよくそのときのこと思い出すんだ。」
志保「そう。」
快斗「・・・知ってる？雷って元々は『神が鳴く』って書くんだぜ。

昔は『神様の仕業』って考えられていたらしい。」

志保「神様ねぇ。」

昔、まだお姉ちゃんが生きてた頃、私は神様にお願いしたことがあった。

『お姉ちゃんを助けてください』『私を組織から助けてください』って。

志保（神様・・・）

そこで快斗があ、と声を漏らす。

快斗「やんできた。風も弱くなってきたな。・・・これなら行けるかな。」

志保「え？」

私は黒羽くんの後ろをついて行った。

靴を履いて外に出る。

先生達に見つからないよう静かに。

こういうところでは昔の経験が役に立つ。

黒羽くんは怪盗キッドの、私は組織だったときの・・・。

志保「ちょっと？どこ行くのよ。」

快斗「前にここに来た時見つけたんだ。今年は見れるか不安だったけどよかった。」

快斗につれてこられたところには小さな光がたくさん散らばっていた。

志保「蛍・・・。私、初めて見たわ。綺麗ね。」

快斗「だろ？」

黒羽くんはニッ、と笑った。

快斗「それより、今日はあの腕時計してないんだな。」
志保「え？」
快斗「ほら、お姉さんの形見の。いつもつけてんのに今はつけてないから。」

私の大切な腕時計・・・。
あれは私と工藤くんがまだ小学生の姿で出会って間もないころ、
工藤くんが私に渡してくれた。
『明美さんが亡くなったときにつけてた腕時計だ』って言って。
けど、私はいらない、って言った。
お姉ちゃんのことを思い出したら泣きそうになるから。
なのに彼は『大事に思ってた人だろ？大事に思ってた人のこと、無理に忘れようとするな。
大事に想ってた気持ちを消そうとするんじゃねぇ。・・・俺が守ってやっから。』
そう言って渡してくれたあの腕時計。
あれから私は常につけていた。
今日は雨に濡れて壊れないようにカバンの中に入れた。

志保「カバンの中にあるわ。」
快斗「そう。それじゃぁ、そろそろ戻ろうか。先生に怒られるのも嫌だし。」

そして私達はキャビンへ帰っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー
志保（え？ない・・・たしかにココに入れたはずなのに）

私が帰ってきたとき部屋の中はまだ騒がしかった。
私は外から帰ってきてすぐにカバンの中を探した。
カバンの中身も全て出して探してみたが見当たらない。
そのとき、後ろから声をかけられた。
「宮野さんが探してるのってあの傷だらけの腕時計？」
振り返ると茜が軽く笑みを浮かべて立っていた。

志保「そうだけど、あなたどこにあるか知ってるの？」
茜「うん。知ってる。クスッ。」
志保「どこにあるの？」
茜「確か、あのテントを建てた辺りだったかな。落ちてたから大きな石の上に置いたわよ。」
志保「そう。」

私はそれだけ聞くと急いで外に飛び出した。
外は再び大雨で、遠くでは雷も鳴っている。
でも、今の私にそんなことどうでもよかった。
あのときの茜の意味ありげな表情も気にしなかった。
とにかく腕時計を見つけるためだけに走った。
茜が言っていた場所に着いた。
しかし、腕時計は見つからない。
志保 ない・・・どこにあるのよ・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
そのころキャビンでは蘭と園子から志保がいなくなった、と聞いた
新一と快斗が捜索を始めていた。
新一「蘭！志保はいついなくなったんだ？」
蘭「４０分くらい前。部屋の前の廊下で見たよ。　トイレに行った
と思ってたんだけど
　　なかなか帰ってこないから、心配で・・・」
園子「女子トイレも全部探したけど・・・」
快斗「キャビンの中探してみたけどいなかったぜ。」
新一「となると、外か？」
蘭「でも、外ってこんなに雨が降ってるのに。
　　こんな中歩いたら危険だよ！」

そのとき、新一は妙な動きをする人物を見た。
青ざめた表情で窓の外をチラチラと見ている。
新一はその女の傍に行った。

新一「おい、おめー何か知ってんのか？」

すると女はフルフルッと首を横に振る。
園子「そういえば、前本さん志保ちゃんと二人で何か話してたわよ
ね？」
新一「本当に何も知らねーのかよ！」
茜「と・・・時計・・・」
新一「あん？」

茜「腕時計を探しに行ったの。宮野さんは。」
新一「腕時計って、もしかして・・・」
快斗「お姉さんのじゃねーの。カバンに入れてるって言ってたけど、
　さっきつけてなかったし。」
そこで茜はごめんなさい、と言って腕時計を出した。
新一「なんでオメーがこれを持ってんだ？」
茜「ち・・・違うの！！ちょっとからかおうと思っただけ・・・！
　あきらめて帰って来たらちゃんと返すつもりで・・・！」
新一「何でオメーが持ってるのかを聞いてんだ！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

志保（頭がクラクラする・・・）
もう限界だった。いくら夏とはいえ、雨に1時間以上も打たれ続けていたら体も冷える。
「志保！！」
「志保！！」
どこかで声がするが辺りが暗くて何も見えない。
志保「工藤くん・・・」

志保の目に声の主が映ったときにはその人物は志保を抱きしめていた。

新一「大丈夫か？」
志保「なんとかね・・・。」
新一「オメー体冷えすぎだろ。」
志保「仕方ないでしょ。」

そう言った後、志保の体はぐらついた。
そんな志保の体を新一は抱きかかえ、キャビンに戻った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー

茜「宮野さん！ご・・・っ　ごめんなさい・・・っ」
私は前本さんから腕時計を受け取ってその時計をギュッ、と握りしめた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーー

ガタンゴトン、ガタンゴトン・・・

ドサッ

志保「？そこ、蘭さんと園子さんの席なんだけど。」

新一「席かわってもらった。」
志保「・・・そう。」
「「・・・」」
新一「なぁ、俺なんかしたか？」
志保「はぁ？」
新一「お前ここんとこずっと超感じ悪かったし・・・いつもに増して。
目を合わせてもすぐそらすし、ちょっと触れただけで人をバイキンみたいに。」
志保「はぁ・・・あなたほんと鈍感ね。女子がそんなことするのって意識してるから、とか考えないの？」
新一「意識してたのか？」
志保「さぁね。今のは普通の女の子の場合。私の場合はどうかしらね。」
新一「オメーも普通の女子だろ。」
志保「自意識過剰。」
新一「でも、俺はずっと前からお前のこと意識してるんだぜ。
志保もそうとうな鈍感だな。」
志保「意味がわからないわ。」
新一「そうだな。簡単に言うと、俺はお前が好き、ってことかな。
志保は？」
志保「さぁね。でも、あなたが他の人のものになるのは嫌。」

想い出はいつもまぶしくて痛みと切なさを伴う１９歳夏

初めてのキス

1話：19歳夏・神鳴（後書き）

砂時計1巻の後半の部分からのお話です。
台詞は新志風に改造してます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3572y/

腕時計

2011年11月9日03時11分発行